定本

高濱虛子全集

第十卷

俳論・俳話集一

毎日新聞社

〈編集委員〉
高濱　年尾
福田　清人
深川正一郎
松井　利彦
山本　健吉

定本　高濱虚子全集
第十巻　俳論・俳話集(一)
印刷　昭和四十九年二月十八日
発行　昭和四十九年二月二十八日
著者　高濱虚子
編集人　浜田琉司
発行人　朝居正彦
装幀　熊谷博人
題字　矢萩春恵
発行所　毎日新聞社
〒100　東京都千代田区一ッ橋
〒530　大阪市北区堂島上
〒802　北九州市小倉区紺屋町
〒450　名古屋市中村区堀内町
印刷所　図書印刷
製本所　大口製本
0392-480010-7904

第十卷　俳論・俳話集（一）

目　次

俳論・俳話篇

日本派時代……一一
俳話……一三
一、時間と空間の想像／一三　二、元祿と天明／一五　三、俳句は敍情詩に非ず／一八　四、敍景詩としての俳句／二一　五、俳人の天然物に於ける同感／二五　六、俳句に於ける人事趣味／二〇　七、明治の俳人／二三　八、名所舊跡／二六
蕪村調といふこと……二九
菫物語……四〇
俳運……四二
俳話數則……四六
さかれんげ……五一
勞力／五一　金錢／五二　詩人／五三
俳話二則……五五
明治三十三年の俳句界……六三
俳話……六五
配合／六五
虛碧對立時代……六九
現今の俳句界……七一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「溫泉百句」／七一　「鎌倉江の島漫吟」／九九　「日本」の俳句／八二　附言／八六
再び現今の俳句界に就て……八九
俳話（一）……一〇一
俳話（二）……一〇五
俳諧スボタ經……一一四
消息……一一三
俳諧一口噺……一一六
天和以前の芭蕉の句（一）／一一六　天和以前の芭蕉の句（二）／一一六　俳人のゆとり／一一七　俳句八品／一一七　力の這入つた句／一一八　鷄頭三句／一一九　感覺美／一二〇
「日本」の俳句／一一一　「日本」投句家に告ぐ／一一一　背景を控へたる場合／一一一
組織的なる俳句論／一一四　寫生の芋と空想の南瓜／一一五　階級に非ず／一一六
背景ある句……一一七
消息……一一一
消息……一一六
守舊派時代……一一九
俳句入門……一一一
今の俳句に對する三通りの意見／一一一　平明の句／一一一　複雜といふ事／一一一
露月君に答ふ／一一一　俳句は簡單なる詩形／一一一　力强い句／一一一　芭蕉の句子

規居士の句／一五四　餘韻のある句／一五四　形式を先にして生まるゝ文學／一五四
簡單な文學としての根柢の要求／一五五　子規居士の句／一五六　拘束といふ事／一五六
季題趣味の破壞は俳句の破壞／一六〇　季題趣味の擴充／一六一　慌だしき自然主義
の影響／一六二　石鼎君の句／一六三　應援／一六八
法師君の俳論……一七二
六ケ月間俳句講義……一七四
第二章　季題（上）／一七四
所謂「新傾向句」雜感……一八七
一、新傾向といふ名前／一八七　二、革命運動としての價値／一八九　附言／一九一
俳句の作りやう……一九二
ぢつと眺め入る事／一九二　ぢつと案じ入る事／二〇〇
十八卷の首に……二〇七
進むべき俳句の道……二一〇
緒言／二一〇　緒言（ツヾキ）／二一三　主觀的の句／二一五　主觀的の句（ツヾキ）／二一三
主觀的の句（ツヾキ）／二一八　主觀的の句（ツヾキ）／二二五　主觀的の句（ツヾキ）／
二四二　各人評に移るに先ち／二四六　渡邊水巴／二四九　渡邊水巴（續）／二五五　村上鬼
城／二五九　飯田蛇笏／二七〇　長谷川零餘子／二八三　石島雉子郎／二九四　原月舟／
三〇四　前田普羅／三一四　原石鼎／三一六　西山泊雲／三四〇　奈倉梧月／三四五　長谷川
かな女／三四八　佐久間法師／三五一　關萍雨／三五六　杉本禾人／三六〇　池田青鏡／

三六三　山本村家／三六六　山本果采／三六七　木村子瓢／三六九　鈴木桃孫／三七三　増永徂春／三七五　島田的浦／三七九　清原枵童／三八一　原田濱人／三八六　野村泊月／三九一　村上蛺魚／三九四　高橋拙童／三九七　鈴木禪丈／四〇一　岩木躑躅／四〇四　久世車春／四〇八　池田義朗／四一一　平川へき／四一四　大橋菊太／四一七　結論／四二〇

校異篇……四三三

解題……栗田　靖……四五五

解説……松井利彦……四六三

第十卷

俳論・俳話集

(一)

凡例

一、本集は、新聞、雑誌に初出の俳論・俳話を用いて底本とした。

一、各論の末尾に初出の年月日、新聞名、雑誌名を附した。

一、校異篇を設け、本文と単行本所収の俳論・俳話を対比、異同の個所を明らかにした。

一、この集に関して校合した単行本名を記すと、内外出版協會版『俳句入門』、荻原星文館版『俳句入門』、『高濱虚子全集』第八巻・第九巻、『定本虚子全集』第六巻・第七巻、『俳諧馬の糞』、『明治文學全集　高濱虚子　河東碧梧桐集』、『俳諧一口噺』、『新春夏秋冬（春）』、角川文庫『進むべき俳句の道』、實業之日本社版『進むべき俳句の道』、『俳句文學全集　高濱虚子篇』、『俳句とはどんなものか』、實業之日本社版『俳句の作りやう』（大3）、實業之日本社版『俳句の作りやう』（昭27）、『俳句と自分』、『朝の庭』である。

一、本文は、底本の用字、仮名遣い、誤植、ルビは原則としてそのままにすることとし、誤植にはママを附した。訂正は校異篇による。ただし底本が総ルビの場合は原則として、ルビを削除した。

一、難訓については初出の個所で新しくルビを附した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

俳論・俳話篇

日本派時代

俳話

俗宗匠の學なきをのみ責む可きかは、所謂文學の大家必ずしも俳句を知らず、往々にして僻解を試み折角の好句をして沒趣味ならしむるもの多し、蓋し僅々十七字詩、而して天地山川草木より四時の變化を歌はんとす、可成丈け文字を省略して意味を深長ならしめざる可からず、これ普通の美文若しくは歌などに比較して一層解し難き所以なり、殊に元祿の俳句は動詞を省略すること最多し、唯名詞關係詞を排列し讀者の想像に依賴して風景を描き感情を敍することあり、假令ば

秋風や藪も畑も不破の關　芭蕉

の意を推せば『今は藪や畑になつてゐる不破の關跡扨ても物淋しく秋風の吹くことよ』なるべし、斯く動詞等の省略に伴ふ關係詞の働など研究の價値無きに非ざれどやゝ無趣味に陷るが故今は略す、次に俳句を讀むに當て注意すべきことは

一、時間と空間の想像

なり、試に彼の

坂はてる〳〵鈴鹿はくもる間の土山雨がふる

なる俗謠の意を探ぐれ、一人の旅人若くは馬士が坂、鈴鹿、土山と順次經過するにつれ時間上の變化に伴ふ天候の變化を顯したるものなりや、抑亦同時に於ける三所の景色を描出したるものなりや、孰に解する方趣味一層深

ふして詩情特に愛すべきものあるや、よし三所を經過して後にこの變化を知るが實際なりとするも這般の理屈を放擲して同時に一幅の畫圖に描かる可き鈴鹿山路の風景を想像すること無論詩人の心なる可し、斯く詩中に時間の經過を想像せず空間上の想像を逞くすること俳句を解するに必須の一要件なり、

湖の水まさりけり五月雨　去來

の句も理屈よりいへば、五月雨うちつゞきて湖の水まさりたるには相違なきも、こは唯連想より來る可き時間經過の想像にして湖の水まさりたる所以を理性に問ふものにすぎず、五月雨、湖の水まさりけりの兩概念は殆んど同時に讀者の腦裡に喚起さる可きものなり、即湖の水まさりけりと詠嘆する時尙五月雨のしとしとと降りゐる景色なり、

斯く時間上の想像はこれを放擲し同時に兩概念を腦裡に喚起して一幅の畫圖を描くより讀者は空間上の想像を逞くして情感の連想をおこすべし、餘情と稱するものこれなり、即湖の水まさりけりと湖面を眺むるに比良はもとより唐崎堅田のあたりも雲たれて山田矢走の浦々も薄黑みて見ゆる雨中の景、身は瀨田の橋上に立つか、そも〳〵三井か石山か、いづれも讀者の想像にあるべし、

荒海や佐渡に横たふ天の川　芭蕉

獺祭書屋主人此句を評して曰『此句を取て一誦すれば波濤澎湃天水際涯なく唯一個島の其間を點綴せる光景眼前に彷彿たるを見る、這般の大觀銀河を以てこれに配するに非るよりは焉んぞ能く實際を寫し得んや、天門中斷楚江開の詩は此句の經にして飛流直下三千尺の詩は此句の緯なり』と、然り讀者は先づ荒海といふ觀念と佐渡に横たふ天の川という概念とを同時に腦裡に喚起して空間上の想像を逞くせば誰れかこの壯大なる畫圖に接せざるものぞ、

子規大竹原を漏る月夜　芭蕉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com